

120歳通信 2016年4月号 (617分の43号)

発行元 444-0124 愛知県額田郡幸田町深溝上池田36 G & G 吉見典生
0564-62-8144 Fax 0564-62-9696 E-mail papi@tms21.jp papi-pero@i.softbank.jp
URL www.waraiyoga.pw www.tms21.jp Face Book www.facebook.com/norio.yoshimi

ひと筆書き世界一周旅行再開



2月9日、キリマンジャロ登山を終えムウェカキャンプを下山し、カラツの街で泊った。7日間のキリマンジャロ登山中は着の身着のままで過ごしたため、特に下半身はおもらししたこともあり、臭くてたまらなかった。着替えをしてシャワーを浴びひげをそり、ほつとした。7日間も山を歩きまわったにもかかわらず4人とも高山病の影響もなし、足腰の痛みも皆無であったのは驚異的なことである。これは今回の旅の企画者でありリーダーでもある三好郁さんの「歩き方の指導」とわたしの「笑いヨガ」の「呼吸法」の指導のおかげと思う。

2月10日は、カラツの街から、ンゴロンゴロ保全地域へ行った。途中の村であり塚を見ていたらマサイ族の



子どもたちがわれわれをめずらしがって近寄ってきた。ンゴロンゴロのサファリは、巨大な噴火口(264km²)の中にある。わた



したちは、マサイ族の男性の運転するランドクルーザーでサ

ファリを巡った。ランドクルーザーの天窓を開いて、動物たちを見るのである。ライオンの夫婦がねそべっている。20メートルくらいの手前で、一匹のガゼルの子どもが群から離れてライオンを挑発するかのように、ぴょんぴょん跳ねている。ライオン夫婦は何の反応も示さない。満腹なのだろう。ここでは、わたしたちはヌーやシマウマ、ガゼルの群れ、象やライオンのつがい、駝鳥、イボイノシシ、カバ、ハイエナ等を見た。どの動物も満たされているのか争っているものはない。(人間がえさをやっているわけではない)

アルージャからキリマンジャロ空港までは一本の長い道が続いている。今日から雨季に入ったようだ。乾いた大地が水を含み、これまでのほこりっぽさから突然至るところに池ができた。運転手がここは「カイロとヨハネスブルグの中間にある」と云った。このときわたしの胸は高鳴った。わたしのひと筆書き世界一周の旅はオーストラリアのケアンズで止まっている。3年後は掛川の萩田さんとアフリカ一周3ヶ月の旅をする約束をしている。その間、ケアンズからアフリカのどこかの入口までひと筆でつなげなければならない。アフリカ3ヶ月の旅のときには途中でがん患者だった人と合流してもう一度キリマンジャロ登頂をめざしたいと思う。それまでに彼女には「笑いヨガ」を一所懸命やってがんを完治してもらいたい。彼女には明後日、病院を見舞いそのことを伝えるつもりである。



2月11日には、ドーハに立寄りより観光した。この地は23年前「ドーハの悲劇」として知られている。サッカーのワールドカップ出場権をイランとかけて最後の数秒で同点され出場権を逃したところだ。今年はうってかわってオリンピック出場権をかけて同じイランと競い合って、日本がどたん場で1点入れて2対1として出場権を獲得して「ドーハの歓喜」とした。そして決勝では韓国と対戦し0対2で負けていたゲームを後半戦で3点入れ「ドーハの奇跡」ということばを生んだのである。

今回のタンザニアのキリマンジャロ登頂から始まってドーハに終った旅と、1年前のオーストラリア半周ドライブ旅行を一冊にまとめて「ボレボレ」という題で本にするつもりである。4月中に完成したいものだ。「ボレボレ」は先にも書いたように「ゆっくりりゆっくりり」という意味である。5,895m



のキリマンジャロもボレボレで行けば、何の障害もなく達成できるのだ。

これは、人生も会社経営も同じである。ボレボレと歩いて125歳まで生きましょう。ボレボレと人生を味わいつつ……。

